

月刊

いじろのとも

第十一卷

十月号

刹那に殺す

刹那をつないで

刹那に生きる

現代人

刹那に怒り

刹那に殺す

永続するは

自己への執着

怒りへの執着

怨みへの執着

欲望への執着

大和の国の使命

日本は

大和の国

世界中と

大きく

和そうではないか

人生を考え直して

みたい人は（八一）

『正法眼蔵』解説（二五）

有時の巻きを続けます。

時は一向にすぐるとのみ計功（けこう）して、未到と解会（げえ）せず。解会は時なりといへども、他にひかるる縁なし。去来と認じて、住位の有時と見徹（けんてつ）せる皮袋（ひたい）なし、いはんや透関（とうかん）の時あらんや。たとひ住位を認ずとも、たれか既得恁麼（きとくいんも）の保任を道得せん。たとひ恁麼と道得せることひさしきも、いまだ面目現前を摸（もさく）せざるなし。凡夫の有時なるに一任すれば、菩提涅槃もわづかに去来の相のみなる有時なり。（はてへんに索）

例によつて、参考までに玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）の現代語訳を引用させて頂きま

す。時というものは、ただひたすら過ぎていくものと

ばかり考えて、未だ到らないこと 未到 もまた、時であるとは気がつかない。気がつくということは時であるけれども、時そのものはそのために変わることはない。

ところで、時というものは去来するものであるとのみ認知して、定住している有時を徹見しているものはまれである。まして、そこに解脱の時があるのか。また、たとひ定住している有時を認知していても、もともとそうであった有時を持ち続けているといい得るものが、果してあるうか。さらに、たとい、そうであるといい得ること久しきにわたっても、本来の面目が現前するのをまだ手さぐりしているばかりである。凡夫の側の有時という視点からのみ見れば。菩提でも涅槃でも、やつと去来する特徴だけの有時にすぎなくなってしまう。

内容そのものは、これまで言つて来たことで、新しいことはないのですが、ことばがかなり曖昧で、難しく、大抵の解説は誤解しています。ですから、解説書ごとにまったくちがった解釈がなされているのです。

私が理解したことを、述べていきたいと思ひます。一つひとつの文章を追つて、見ていきます。

まず、「時は一向にすぐるとのみ計功（けこう）して、

未到と解会（げえ）せず」ですが、前半は、現代語訳で大体、いいと思います。先月号で時間には、三つあると言いましたが、ここでの時は、物理的な時間の流れのことです。時間を、物理的に過ぎていくもの、とばかり思っただけなら、ということですが。このことは、既に七月号で、「時は飛去するとのみ解会すべからず」という言葉で述べられていました。ご参照下さい。そういうふうに思えば、これに続く「未到と解会せず」ということになるというわけです。

しかし、この部分が、なかなか、難しいようです。現代語訳は、（物理的）時を主語として、それが未到だと気がつかない、と訳していますが、これだと全く理解できません。もし時を主語にするなら、先月号で述べました、第三の時、つまり、仏の時（＝永遠の時、過去と未来を現在に統合した時）が、未だ（己に）到らないことを理解できない、というように訳すべきです。自然なのは、時を主語にしないで、自分を主語にする訳です。そうしますと、「自分が未だ永遠の時に到っていないことを理解しない」ということになります。

次の、「解会は時なりといへども、他にひかるる縁なし」ですが、後半が特に難しいようです。現代語訳では、まったく理解できません。

新たに訳してみますと、永遠の時に到ると分かることは時であるけれども、「他にひかるる縁なし」となります。この後半の直接引用部分の訳は、解説書によって、区々様々です。正しく理解できていると思えるものがありませんが、わたしは、永遠の時に到る境地は、他に引かれていく縁がない、つまり、そこから縁起していると分かるような直接的なもの（心理現象）がない。それは、純粹に内的な体験の世界であって、言葉で他者に示すことができないものである、ということを行っているように思います。体験したもののみが、理解できるものだということです。日本人には非現実的な例えかもしれませんが、飢えたことのない人に、飢えるとは、どういうことなのかを理解させることはできない、ということですが、もう少し言いますと、生死を超えた永遠の時の体験は、絶対の境地であって、相対的な規定である、いかなる縁起をも超越しているということです。そこには、どんな「他にひかるる縁」もないのです。

次の「去来と認じて、住位の有時と見徹（けんてつ）せる皮袋（ひたい）なし、いはんや透関（とうかん）の時あらんや」ですが、現代語訳で、だいたい、よいと思えます。「皮袋」は、手持ちの辞書で調べても載っていませんが、「人」のことだと思えます。また、「透関」

は、字義は、関所を透（とお）ることで、仏教での解脱を意味します。

次の、「たとひ住位を認ずとも、たれか既得恚麼（きとくいんも）の保任を道得せん。たとひ恚麼と道得せることひさしきも、いまだ面目現前を摸（もさく）せざるなし」に進みます。

「住位」は、先月号でも「有時の住位」として出ましたし、今月号でも既に出ました。それは法の境地（位）に住することです。ですから、訳は、「たとえそういう境地があると認めることはできても、誰が、既に得ている、こうした（＝恚麼）法の境地に住することを、道を修行することで得ることがあるうか。たとえ、そうだと思つて修行し道を得ようとすること久しくても、いまだに、悟りの面目がどう現実に現れるかと模索しているものばかりである」ということになります。

ここで一つ、補足しておきたいと思つてあります。それは、「既得恚麼の保任」という言葉についてです。私は、これを読みますと、感じるのですが、それは、髄識（無意識）に宿す、如来蔵のことを言っているのではないかということです。私たちは、誰でもが、こうした解脱を可能にせしめる如来を生まれながらに宿している（保任している）ということなのです。それが、既得で

あるということです。

最後の一文、「凡夫の有時なるに一任すれば、菩提涅槃もわづかに去來の相のみなる有時なり」ですが、この「凡夫の有時」とは、前に述べました三種類の時間と言えますと、二番目の時間になります。つまり、未來（自己）と過去（他己）の間（はざま）をアンビヴァレント（両面価値的）に悩みながら現在として弁証法的に運動している時間です。

時間をそつした時間とのみ考えれば、菩提（悟り）も涅槃（絶対な平安）も、凡夫が体験する単なる過去・現在・未來と流れている時間的な心理現象とのみ捉えることとなる、ということなのです。

解脱の境地、有時の而今は、そうした縁起を繰り返す「意識」の世界の弁証法的論理を超えているのです。それは、「無意識」（髄識）の絶対的な世界の中に存在するのです。でも、その体験のない者には、理解できないことです。そこが、人間の悲しいところと言えるのです。特に民主主義のように、誰でもが一人ひとり、意見や思想を持って、という「教え」では、こうした聖者の「本当の教え」を信じることができません。こうした聖者の教えに従って生きるときだけ、人間は間違いを犯さないでおれるのです。

自作詩短歌等選

凡愚も賢者も同等対等

民主主義では
真の問題状況と
その対策が
的確に

分かっている人の意見も
分からない人の意見も
同等・対等

そして
その意見への
賛成の多さだけが
真理判定の基準となる

なんと
おそろしいことよ

日本語の劣化

敬語は他者との
距離の感覚

いま
自己肥大して
他者の存在を
意識できなくなつて
敬語が消えそう

こんな国がどこにある

下着を盗んだことが
バレルと思つて

なんの罪もないのに
一家六人を殺傷した
でも

十五歳というだけで
誰にも刑事責任を

問わない
こんな国がどこにある
こんな社会がいつまで続
く

ああ恐ろしい
無責任時代
無軌道時代
無関心時代
ジコ虫時代

脆弱な精神には癒し

カウンセリングが
企業内でも
活発化してきている
という

現代人の脆弱な心には
癒しがいる
慰めがいる

もっと根本的に
強靱な精神になるよう
鍛錬したらどうですか

自作随筆選

真の道德教育とは

最近の若者たちの犯す殺人や殺人未遂事件には、際立った特徴があります。それは、その人への恨みや怒り、あるいはその人を対象とした強盗・強姦・放火などに伴うような、直接的な目的でそうした犯罪を犯すのではなく、その人には無関係な、単に自分の別な目的を達する手段として、それを犯すことです。

この一カ月に起きた事件で言いますと、例えば、児童養護施設に入所していた十七歳の少女は、その施設から出たいという目的のために、その施設の五階から、無関係な三歳の女児を投げ落として死亡させましたし、また、十七歳の工業高校の生徒は、誰かを殺せば少年院に入れてもらえ、仲間の恐喝から逃れられるという目的のために、その学校で一番おとなしい無関係な先生の首をナイフで切りつけました。また、中三の少年は、通りがかりの中一の少年の頭に、突然、金づちで殴りかかりました。殺人未遂で逮捕されましたが、その少年は取調べに対し「目立ちたくて、誰でもいいから殺そうと思った。人を

殺せば学校に行かなくてもすむと思った」と供述したといえます。三例とも、自分が殺害の対象としてねらった人は、自分の達しようとする目的とは、全く関係のない人たちです。ここに、他己を萎縮させ、倫理・道德感を喪失させた、現代人の典型をみる思いがします。

かつて、カントは、道德原理として「定言命法」と呼ばれる、次の原理を提示しました。「君の人格および他人の人格の内なる人間性を、単に手段としてではなく、常に同時に目的として扱うように行為せよ」と。

これは、あらゆる道德の基本原理を示すものですが、こんな道德律さえもが、とうの昔に吹っ飛んでいます。

いまは、自分だけではなく他者に対しても「人格の内なる人間性」を手段として用いることは勿論のこと、人間性といった抽象的な価値ではなくて、相手の肉体や生命までも、手段とするようになってしまっているのです。

先の「教育改革国民会議」の中間報告には十七の提案があり、その中に「学校は道德を教えることをためらわない」というのがあります。これまでも、道德教育は既に為されて来たことで、取り立てて言うてみても、いまさらの感があります。さらに言いますと、道德は「教えること」ではないのです。自ら「体験」して学ばなければならぬのです。その基礎にあるものは、学校が最

も大切にしている、知識や技能ではありません。その基礎は、「こころ」にあるのです。さらに、そのまた基礎には、「ずい」識（無意識）があります。それを磨くことが大切なのです。それは、日本人が失っている宗教の問題です。ですから、これは、現代日本人には全くいっていいほど理解できないのです。

分りにくいと思いますので、もう少し、説明を加えていきます。

人の命や身体さえも、自己の欲望の満足や不満の解消のための手段と化する現代人の「自己肥大化」と「他己矮小（わいしょう）化」は、カントの言う道徳律を教えてみても、決して解消はしないのです。

そうした「自己肥大化」と「他己矮小（わいしょう）化」のもとでは、老子で言いますと、「礼」さえもが失われていると言えます。それは、社会を維持する最低の条件です。「礼」の下には「義」がありますが、それは、礼と共に、教育して教えることができるものです。技能や知識として得られるものです。カントの道徳律はここに入ります。でも人間は、知識として「こうすべきだ」と言ってみても、自分の情動（損得や好き嫌いなど）が絡みますと、そんなものは吹っ飛んでしまいます。

そうならないためには、その基礎にある「仁」がなけ

ればなりません。それは、自分の情動を制して、他者を尊重し、愛するところです。それができるとき初めて、義を義として成り立たしめることができるのです。また、礼も、慇懃無礼といわれることのない、真の礼に成るのです。そして、そういうふうな礼と義と仁が円満に実現できる心の働きを、老子では、徳と呼んでいるのです。道徳教育が真の道徳教育になるためには、仁を確立し、徳を実現しなければならないのです。

しかし、これでも十分ではありません。これは、ただ意識の世界だけのことです。私たち人間の精神は、意識できる世界だけではないのです。意識できない領域があるので。それを、私は「髄識」と呼んでいます。一般には無意識あるいは潜在意識と呼ばれます。その領域は、なかなか理解しがたいのですが、最も卑近な例で言いますと、健康に悪いから、たばこはすうまいとどんなに意識して思っても、なぜかやめられません。それは、嗜好品だけではありません。食べ物でも同じことです。そうした、自己の情動の制御が自由自在にできるようになるためには、無意識を磨かなければならないのです。それを道元は「人は磨いて仁に至る」と言いました。

真の道徳教育は、ここまで行かなければ、だめです。それは、まさに宗教教育といえるものなのです。

感謝して母を殺す？

少し古い新聞のスクラップを見ていましたら、八月六日付けの日本経済新聞の中に、次のような見出しを見つけて、驚きました。その見出しとは、次のようなものです。

「岡山殴殺 あす少年を家裁送致」

「母に負担かけたくなく・・・」

「母への感謝の気持ちも」

この見出しにあります「岡山殴殺」とは、野球部の十七歳の生徒が、同じ部の生徒数人を金属バットで殴り重軽傷を負わせて、自宅に逃げ帰り、家で横になって休んでいた母親をも金属バットで殴り殺して、自転車で逃走し、捕まった事件のことです。

驚いたと申しますのは、この見出しを見ますと、少年が母を殺したのは、「母自身のため」である、そして、この記事を書いた記者（世間一般の人々）はそれを是認している、そういった印象を受けるからです。本文には、少年の供述として、次のように書かれています。「病気がちな母に、これ以上負担をかけたくなかった」「犯罪者の母として、周囲から白い目で見られるのは耐えられなかった」と。

なんと自己中心的なことでしょうか。現代人の自己肥大の極致をみる思いです。

人々の心に他己（他者性）のあった時代には、自分が悪（犯罪）を為せば、自分の身内の母や父、あるいは兄弟姉妹や祖父母、さらには親類縁者など、多くの人に迷惑をかけるし、また、悪（犯罪）の直接の対象となる人々の身内の人たちにも同様に迷惑がかかる、そうしたことが、犯罪実行へのショックアブソーバー、つまり、犯罪抑止力として働いていたのです。

ところが、自己肥大したこの少年は、自分の犯罪が母に迷惑をかけることになることは知っていたのでしようが、それが抑止力としてではなく、母の殺害動機として働いてしまったという、極めて意識が自己に中心化していることを示しているのです。母を殺すことほど迷惑なこと（極悪非道なこと）はないのですが、自己に意識が中心化しますと、それが自分にできる恩返しのように思えるのです。母に対して為す悪をそうした意識で正当化しているのです。

どんな理由があろうと父母に対して為す犯罪（暴力）は、極刑に値するのです。父母に対して為す犯罪こそ、まさに、社会秩序・倫理道德の崩壊そのものなのです。でも、宗教喪失と民主主義はそれを麻痺させています。

社会化をどうするか

毎日新聞には、毎月月末に「雑誌を読む」と題して、当月号の雑誌記事の書評が載ります。

八月三十一日は、香山リカ氏が担当していました。見出しをあげますと、『「社会化」教育』、『「儲かる」動機への疑問』、『科学からアニメまで欠ける公共性の視点』です。

内容ですが、最近、少年による凶悪な犯罪が続発するのは、彼らが社会性を欠いているから、つまり、一人前の人間として社会化ができていないからだとする、多くの人たちの指摘をうけて、教育改革国民会議が最近「共同生活による奉仕活動などの義務化」と題して分科会報告を出しましたが、それをめぐっての論評を扱っていません。

記事の中には、幾つかの箇所になるところがあるのですが、ここでは、同氏が記事の最後に自分の意見としてあげている結論だけを検討してみたいと思います。それは次のようなものです。

彼ら（少年たち）が自発的に社会とのかかわりを持ち、市民として他者への眼差しを手に入れられる

ようになるためには、どうすればよいのか。私自身はそれぞれの分野にいるおとなが、自分の仕事や生活に取り組みながら生き生きと楽しくすごすことが大切なのではないかと思う。まず、「おとなになつてみたい」という「生きる動機」を子どもたちに与えるところから始める必要があるからだ。

社会化が必要であることには、香山氏も同意するのですが、では、それを効果的にするにはどうしたらよいか。それには、何人かの論者が言うように、たとえば奉仕活動のような社会との関わりを、義務としてやらせるのではなくて、自から進んでしようとする動機付けが大切だというわけです。そうしたことを受けて、以上のような結論になった、ということですが。

この意見は、私から見ますと、全く自己に閉じているため、人間の教育（社会化）への洞察に欠け、真の事態が分かっていないように思えます。

かつて、本誌の平成八年（第七巻）一月号に「漱石の示唆」と題して、人間の教育の在り方の基本について述べました。また、その他の号でも、いたるところで教育のことにふれています。ですから、もう繰り返さなくてもよいのですが、あまりにも、人々が分かっていないので、書かなければという気になります。

私の理論でいいますと、社会性は「他己」のことです。難しくなつて恐縮ですが、他己の基本命題と云つていますのは、「人間は法を目指して、より善く社会的である」とする存在である」というものです。

では、社会化、つまり他己を育てるためには、どうすればよいのか、ということですが、それは、香山氏が言われるように、「楽しく生きようとする動機付け」を高めることではないのです。そうした動機付けは、自己に属することなのです。ますます自己肥大をもちたします。

他己を育てるためには、大人の側の「愛情」をもつた「統制」がいます。それには、いま多くの親がしているように子どもをベット化したり、エゴ追求の手段化したりしないで、まず、親が子どもにこころを開き、子どもを信じ、親との情動の共有を体験させます。そして、楽しい成就の喜びが感じられる「自由」を十分与えるのです。その上で、子どもが我慢してしなければならぬような統制を加えるのです。それは、苦しい労働であったり、欲望を抑え、我慢して規則を守ることであったりします。でも、大人がそうしていれば、統制しようなどと思わなくても、勝手に子どもはそうするのです。

凶悪犯少年の精神鑑定

最近、少年（十七歳が多い）による、常識では考えられないような凶悪犯罪が続発しています。それらは、愛知県で起きた老婦人を「殺す経験がしてみたかった」という動機で殺した事件、精神病院から外泊許可をもらつて出て、バスジャックし、平然と女性を殺した事件、岡山の金属バットでの母親殺事件、山口での新聞配達少年の母の殺害事件、大分の六人殺傷事件などです。

こうした事件で決まつて行われますのは、少年の精神鑑定です。確かに、こうした犯行は、これまでの常識では考えられないことです。なぜ、こうした犯行が行われるのか。例えば、前述の「殺す経験をしてみたかった」といった動機で殺人を犯すといったことは、これまでに、考えられなかったことなのです。

ですから、その少年に特有の精神病理があるに違いない、そう思うことは、当然と言えば当然なのです。そして、一人一人の人権を大切にされる現代では、それを少年の刑を軽減するために利用しよう、そういう弁護士のお惑があるのも当然でしょう。

でも、こうした犯罪は、その少年だけの精神病理であ

ると考えるだけでは不十分だと思つたのです。確かに、そうした犯罪を少年の誰でもが犯すわけではありませんので、その個人の原因を明らかにすることは、大切なのですが、でも、そうした事件はこれまでに無かつたわけですから、そうした事件が頻発する社会的な原因、あるいは社会的病理、もつといえ、日本人全体が陥っている精神病理が明らかにされる必要があるのです。

そうした病理が明らかにならない限り、いくらこれまでの精神医学の理論で測ろうとしても測れるものではありません。新たな理論なり、モデルなりが求められているのです。

例えば、バスジャックした少年は、自己の存在感がなかつたので、派手なことをして、人目を引きたかつた。だからあんな凶悪なことをした。精神鑑定でそういう動機が明らかにされたとなつていようです。でも、なぜそんな動機で、あれ程のことをするのかは、明らかではありません。これまではそんな動機による凶悪な殺人は無かつたのです。そこに現代の特有な病理があるのです。それは、宗教の喪失と現代民主主義の行き過ぎによる、自己肥大・他己萎縮なのです。

最近の精神医学では、こうした頻発する少年たちの凶悪犯罪は、精神病ではないが、「行為障害」とか「解離

性障害」とか呼ばれる精神障害とされるようですが、それは、ある種の不適応行動や犯罪行動で共通なものを集めて、分類しているだけで、なぜ、そうした障害が起こるのかを説明していません。ですから、いくらそんな名前を与えてみても、どう治療したらいいのかとか、そうした障害が起こらないようにするためにはどうしたらいいのかには、ほとんど役に立ちません。カウンセリングをしていけば、学校で起こっている問題（学校崩壊）が救えると考えられると、よく似ています。

そこに共通する欠陥は、人間性への洞察が欠けているということなのです。人間が人間として生きるとは、どういうことなのか。そのことが、分からなければ、人間の精神に関わることは、見えてこないのです。

何度も述べて来ましたが、人間は、「精」と「神」という二つの心をもっているのです。自己の生き方を追求する心と、他者を求め、愛する心です。その二つの心の統合を求める心が、人を信じる心なのです。もつと言えば、神や仏を信じる心なのです。そうした心を育てない限り、今日の日本人の精神病理を救うことは、不可能なのです。

後記

一、先月号を書いた後で、大雨が降りました。畑の池も満水になっていきます。九月の雨量は例年の何倍もあつたと言います。サトウキビが殆ど枯れてしまった家もあり、異常気象だつたようです。自然破壊のせいでしょうか。

二、前月号に幾つか誤りがありました。判読できないものだけを、あげておきます。書き出しシリーズの箱の中の後ろから二行目に「活 地」とありましたが、このはワープロにないので、後で他の本からコピーして張りつけようと思つていたところです。の字は、魚偏に發で、発音は「はつ」です。発と同じ意味です。他にもありました。省略します。申し訳ありませんでした。

三、先月号で、ジャガイモを植えたことを、書きましたが、乾燥したところへ植えたせいか、殆ど発芽しませんでした。大失敗です。植える前も植えてからも、水をやったのですが、足らなかつたようです。今月になって、大根、わけぎ(球根)、白菜、人参、小松菜、えんどう、タマネギの苗床(九月中旬)、キャベツの苗床、時なしキュウリ、などの種を蒔きました。また、近所の方に、ブロッコリーの苗を頂き二十株ほど植えました。

四、今月号は、随筆が増えて、「釈尊のことは」を省略させて頂きました。また、詩短歌等も一頁ほどになりま

した。随筆として書きたいことが、山ほど出てきます。

五、いま、価値観が本当に混乱しているのだと、つくづく思います。新聞に書かれる、同じ事象についての記事も、否定するもの、肯定するもの様々です。例えば、少年法改正にしても、教育基本法についての議論でも、まさに、百家争鳴の感があります。

六、何度も書きますが、悲しいかな、日本人が思想を失つていることに気付いている人が殆どいません。民主主義が説くように、一人一人が、意見や思想をもつようになっていきます。アメリカが目指した民主教育の成功です。でも、社会は確実に崩壊に向かっています。

月刊 こころのとも 第十一巻 十月号 (通巻 一三 号)	平成十二年十月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>じよんせい</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

